Osaka University Knowledge Archive

Title	母語場面初対面会話における話題管理に関する対照研究 : 日台中の同性社会人データをもとに
Author(s)	蔡, 諒福
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59147
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【13】

氏　　名	蔡（サイ）　諒（リョウ）　福（フク）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２５００２　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**母語場面初対面会話における話題管理に関する対照研究－日台中の同性社会人データをもとに－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　深澤　一幸 （副査） 教　授　三牧　陽子　　准教授　義永美央子

論　文　内　容　の　要　旨

日台中間の相互交流が盛んになるにつれ人々の接触する機会が増えているが、異なる言語文化的背景に対する認識の不足が円滑なコミュニケーションを阻害することがある。これを改善するため、会話の話題に焦点を当て、それぞれの母語場面における話題管理の特徴を解明することが重要である。しかし、従来の話題に関する研究は話題の単一な側面に焦点を当てたものが多く、話題に関する重要な課題を包括的に分析した研究はまだ見当たらず、また日台中間の対照分析は不十分である。初対面会話は第一印象を決める重要な場面であるが、どのような話題を選択し、回避するか、また話題の転換や派生がどのように行われるかは、母語場面によって異なる。こうした違いを解明し、理解することは、異文化の相互理解の促進に役立つと考えられる。そこで本論では、話題管理を、会話における「話題選択」「話題転換」「話題導入および派生」「話題回避」に分けて話題に関する重要な課題と定義し、この四つの課題に基づき、日台中の同性社会人による母語場面初対面会話をスキーマ理論の観点から分析した。スキーマは人間の行動心理に関する説明を目的に用いられる概念であるが、比較文化的な研究にも応用することができるため、特定の文化圏に属する成員間のコミュニケーションの特徴を解明し、さらに別の文化圏の特徴と比較するのに適していると考える。また本論では、話題は話者間の相互作用によって成立するもので、階層構造があり、内容的に結束性を有する事柄であると定義する。

第 1 章および**第 2 章**で本論の目的、意義と先行研究の概要について述べた後、**第 3 章**では方法論の検討を行った。本論では、1)映像および音声による会話データ、2)話題選択および話題回避の意識に関するアンケート調査、3)会話およびアンケートに関するインタビュー、の 3 種類の分析データを用いた。データの収集場所は、日本人社会人(以下「JG」という)は大阪、台湾人社会人(以下「TG」という)は台北と高雄、中国人社会人(以下「CG」という)は北京で行った。調査対象の人数は、日中両グループは各 24 人(12 ペア)、台湾グループは 28 人(14 ペア)である。

第 4 章の話題選択に関する分析では、会話データに基づき「大話題選択項目の比較」「話題選択肢からみる特徴」「会話の切り出しにおけるあいさつおよび話題選択の状況」を分析するとともに、アンケート調査の結果についても検討した。大話題を分析した結果、1 ペア当たりの異なりおよび延べ話題数は多い順に CG＞TG＞JG となった。また、3 グループで共通して選択率が高いのは「個人背景」と「仕事」である一方、JG は「趣味・楽しみ」、CG は「出身地」が選択される割合が高い。また、CG は「展望的・将来志向」と「プライバシー」、TG は「転職」「金銭」「他者」に関する話題の選択率が高い。社会的現象を反映する話題は JG では観察されなかったのに対し、CG では「戸籍」「住宅」「地域性」「一人っ子」「物価の上昇」という話題がみられた。アンケート調査の結果では、「天気」に関する話題の選択率は、JG と TG・CG 間に差がみられたが、話しやすい話題として「職業」と「趣味」が選択される傾向は 3 グループに共通していた。避けたい話題については、「性経験」および「宗教」の割合が共通して高い。本章の分析により、JG では話題選択数が少なく、一つの話題に集中して話す傾向が明らかになった。また再生型話題が少なく、プライバシーへの配慮から個人情報や他者に関してはあまり多く語らない傾向があり、主に仕事内容や趣味、居住(出身)地に関連する話題を客観的な立場から話すことが多かった。TG では仕事に関する話題の中で給料や転職にしばしば言及し、金銭や他者に関する話題が頻出した。CG では他者、展望・将来的志向、プライバシーに関する話題が比較的多いのが特徴である。

第 5 章の話題転換に関する分析では、話題転換の構造を再検討し、先行研究で指摘されている「話題終了部」と「話題開始部」の間に、さらに「中間部」を加えることを提案した上で、「話題転換構造」「話題転換型」「非言語行動」「話題転換部におけるメタ発話」の 4 項目に分けて分析した。「話題転換構造」に関する分析では、話題転換部の 3 つの部分(話題終了部/中間部/話題開始部)の有無と組み合わせによって、全 8 種類の話題転換構造パターンを提示し、その出現した部位の数(3/2/1/0)によって割合を算出した。その結果、JG の話題転換構造パターンは TG と CG よりも複雑な傾向にあることがわかった。「話題転換型」に関する分析は、会話者双方による相互作用に注目し、「協働的転換」「一方的転換」「突発的転換」の 3 つの話題転換型に分類し、さらに大話題への転換および小話題への転換の割合を算出した。その結果、JG と TG では大話題への転換の場合、共に「協働的転換」が高い割合を示したが、CG ではその反対の傾向がみられた。「突発的転換」の割合については、TG と CG では平均 3 割であるのに対し、JG では大話題への転換の場合ではみられず、小話題への転換の場合でも 1 割未満に止まっている。次に、「非言語行動」について、話題転換部における頷き、笑いおよび沈黙を相互作用の観点から分析した。JG では、話者双方の頷き、笑いの割合が高く、沈黙は TG と CG の 2 倍近く長いことから、非言語行動においても、対話者間の相互作用が顕著であることが明らかになった。続く「話題転換部におけるメタ発話」に関する分析では、話題転換がスムーズに行われない気まずい状況を、会話者がどのようなメタ発話や反応によって乗り越えるかを観察した。その結果、「同調の発話」「初対面を意識した発話」「緊張緩和の発話・冗談」「話題の提供」の 4 種類の発話や反応がみられた。JG はお互いに同調表現を使い、共感を重視することによって気まずさを和らげるのに対し、TG は会話参加者の片方による自由な発想や行動によって気まずい場面を乗り越えようとしていることがうかがえる。尚、CG では今回のデータの中にはこの種のメタ発話が現れなかった。

続く**第 6 章**では、話題の導入および派生に関する分析を行った。本論では話題間の派生を、先行話題の内容(発話/言葉)に誘発され、それがきっかけとして後続話題が提出されるものとする。また、派生関係のある 2 話題間に別の話題が挟まれるか否かによって、「連続派生型」と「間隔派生型」の 2 種類の派生型がある。分析内容は「時間軸からみる派生話題の出現頻度」「時間帯からみる派生誘発話題項目」「会話例でみる話題の派生の特徴」の 3 点である。分析の結果、1 ペア当たりの派生型話題の数は、JG が 3 話題、TG が 4.7 話題、CG が 5.6 話題であった。時間軸からみると、会話の初頭における派生話題の出現頻度はどのグループでも高く基本情報交換期が観察されたが、出現時点や持続時間はグループの間に相違がみられた。JG は会話の 12 分以降、派生誘発話題と派生話題が無くなる傾向があるのに対し、TG および CG では、出現回数が一定のまま維持される。また派生誘発話題項目の分析結果では、最初の 0~3 分では、JG は「会話実験」と「個人背景」から、TG および CG は「個人背景」と「仕事」からの派生が多くみられた。JG が最初に「会話実験」からほかの話題に派生することから、JG では共通の経験(ともにその場にいる経緯)を重視する傾向、そして TG と CG では、「個人情報」と「仕事」に関する人的情報が重視され、そこからほかの話題に派生する傾向がみられた。会話例の分析結果では、JG では話者や他人に関する話題への派生がほとんど現れず、代わりに客観性の高い話題への派生が多かった。一方、TG と CG では、話者個人や他人に関する話題への派生が多く、人的情報への高い関心が窺える。

第 7 章の話題の回避に関する分析では、まず話題回避行動の定義や原因、回避のプロセスを論じた後、アンケート調査の結果および会話データに現れた話題回避例を中心に分析した。アンケートの調査では、24 話題項目に対する回避選択の割合と話題回避行動に関する記述に基づく話題回避型の割合を比較した。前者について、3 グループに共通してよく回避される話題は、「性経験」「宗教」「収入」であり、グループ別にみると、JG と TG では「政治」CG では「配偶者・恋人」と「親」が高割合を示している。後者の話題回避型の割合については、アンケートの記述を基に、話題回避行動を「消極的回避型」「積極的回避型」「折衷的回避型」「消極的＋積極的回避型」「消極的＋折衷的回避型」「積極的＋折衷的回避型」という 6 つの話題回避型に分類した上で、その出現割合を分析した。その結果、JG は折衷的回避型、TG は積極的と消極的回避型、CG は積極的回避型の割合が高く、さらに男女別に比較してみると、JM(JG の男性ペア)の 7 割は折衷的回避型、CF(CG の女性ペア)の 5 割は積極的回避型で、話題回避の傾向が異なっている。話題回避例に関する分析では、3 グループから計 12 例(JG3 例/TG4 例/CG5 例)を抽出した。JG の 3 例では消極的回避型 1 例と折衷的回避型 2 例、TG の 4 例では積極的回避型 2 例、折衷的回避型と積極的＋折衷的回避型各 1 例、CG の 5 例では折衷的回避型 1 例、消極的＋積極的回避型 1 例、積極的＋折衷的回避型 3 例が観察された。また、会話データをアンケート調査の結果と対比した結果、アンケートの回答と実際の会話での話題回避状況に齟齬がみられた一方で、アンケートにおける話題回避型の傾向は会話例での話題回避型の分布とほぼ合致していることがわかった。

上記の分析の結果、JG および TG・CG 間の、プライバシーの範囲、金銭や個人に関する価値観に対する認識などの相違が話題選択に大いに影響していること、TG・CG の話題の範囲は JG より広いことが確認できた。また JG は話題選択

範囲が狭く、TG・CG よりも広範囲の話題を回避する傾向がある。また話題転換の際には、JG は相互作用による転換が多く、TG・CG は話者の自主的転換の割合が高い。話題の導入および派生に関してみると、TG・CG は JG より話題の派生(再生)の頻度が高く、話題の派生方向についても、JG は仕事や趣味などが中心で、TG・CG は個人や他人に関する話題が多いという違いがみられた。3 つのグループにおける話題管理の傾向をまとめると、概ね TG・CG が共通しており、JG とは異なる特徴を有しているが、TG と CG の間でも、特に話題選択、話題転換のあり方には異なる点がある。

本論の分析により、日台中の母語場面における話題管理スキーマの異同が明らかになったが、それぞれの異なる傾向は、接触場面における話題管理にどのような影響を与えるかについて今後の分析課題である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語母語話者および中国語母語話者による母語場面初対面会話における話題管理の特徴を明らかにすることを目的としたものである。ここでいう「話題管理」とは、会話のなかで何を話すか（話題選択）、または話さないか（話題回避）、話の焦点をどのように移すか（話題転換・展開）といった会話参加者による話題の調整行動である。「話題管理」の方法や中身は言語文化社会によって共通する部分と異なる部分があり、本論文は各言語文化社会における「話題管理」の特徴を比較するための基礎研究と位置づけられるが、将来的には、母語話者と非母語話者との接触場面における摩擦を減らし、異文化間の相互理解の増進への貢献に結びつくことを念頭においている。

さて、本論文でまず長所とすべきは、方法論として、言語行動としての会話データと、アンケートやインタビューなどの意識面調査の両面から収集されたデータをもとに、スキーマ理論を主に用いて、労苦もいとわず、きわめて詳細に分析していることである。また、分析の対象をデータ収集の比較的難しい社会人としたことも、これまでの研究が主にデータの取りやすい大学生に集中していることからみると、特筆すべき進歩である。さらに、「話題管理」を分析するにあたって、「話題選択」「話題転換」「話題の導入および派生」「話題回避」といった４つの柱を建て、きわめて包括的に分析したことも、これまでの研究にはみられない長所といえよう。しかも、従来の研究では日本と中国、日本と台湾といった２国間の比較にかぎられていたものを、日本・台湾・中国の３カ国に広げ、そこで同じく中国語母語話者たる台湾と中国との異同を明らかにした功績は大きい。

その結果として、「話題選択」では日本と台中間の、プライバシーの範囲、金銭や個人に関する価値観に対する認識などの相違が大きく影響すること、日本は選択の範囲が狭く、台中は範囲が広いこと、「話題転換」では、日本は相互作用による協働的な転換が多く、台中は話者の一方的・突発的な転換の割合が高いこと、「話題の導入および派生」では、台中は日本より話題の派生の頻度が高く、派生の方向についても、日本は仕事や趣味などが中心で、台中は個人や他人に関する話題が多いこと、「話題回避」では、回避したい話題項目の特徴とともに、回避行動のパターンの相違など、従来、経験知や印象であった多くの話題管理に関する日台中の特徴を、具体的なデータを通して実証的に明らかにした功績は大きい。

また、実態を把握するだけでなく、例えば話題転換の構造に関して、従来あまり指摘されてこなかった先行話題終結部と後続話題開始部との間に「中間部」を設定することを主張し、その構造の組み合わせパターンから日本対台中の相違を鮮やかに描き出したこと、話題間の派生や再生の傾向を分析するための定義を厳密に行い、分析の方法に先鞭を付けたことなど、本領域の研究に大きく貢献したといえる。

しかし、話題管理の実態を複数の側面から分析するにあたり、それぞれのテーマについて特徴的なパターンを見出した上で量的に分析することが中心となっており、会話の分析に基づくきめ細かい質的な分析が十分とはいえないこと、ともすれば差異を前提にしたような論調になりがちなことなど、課題も残る。しかし、これらは、本論文の価値をそこなうものではない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。